

再現性の C.V. は 4.0~9.1% の間にあり、ともに満足すべき再現性であった。

4) 希釈試験：原点に集約する良好なる直線性が得られた。

5) 回収試験：TSH 濃度の異なる 2 つの sample 血清での回収率は 92.5~113.8%、86.2~105.9% の間にありほぼ満足すべき値であった。

6) 他社 RIA kit との相関：本法と GammaDab kit との相関は $r=0.956$ ($p<0.01$, $n=58$)、shionogi kit との相関は $r=0.938$ ($p<0.01$, $n=38$) であり、ともに推計学的に良好なる正の相関を示した。

7) 正常域：健常者早朝空腹時血清の TSH 濃度は、 $M.V. \pm S.D.$ で $2.52 \pm 0.56 \mu U/ml$ であった。

以上のごとく、本 kit は再現性も優れ、手技的にも簡便であることから日常の TSH 測定用 kit として十分使用できるものと考えられる。

3. B 型肝炎関連抗原、抗体 RIA kit による半定量測定への試み

矢橋 俊丈	金森 勇雄	樋口ちづ子
松尾 定雄	吉田 宏	市川 秀男
木村 得次	(大垣市民病院・特放セ)	
中野 哲	綿引 元	武田 功
太田 博郎	杉山 恵一	坪井 英之
児玉 泰浩	(同・二内)	
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

現在、当院をはじめとする多くの施設では B 型肝炎ウイルス関連抗原、抗体系の検出は感度が最も優れ、手技も比較的簡単な RIA で行われており、臨床に活用されている。しかし、定量的検出は RIA では困難とされ、定量的測定への試みはなされているが、完成されたとはいえない。そこで今回、われわれは、市販の RIA kit の希釈曲線による 5 段階半定量法を試み以下の結論を得たので報告する。

結 語

1) 原血清および 200 倍希釈を同一 kit にて測定すれば、HBs 抗原、HBe 抗原・抗体、HBc 抗体ともに抗原価および抗体価が、著明な高濃度(卍)、高濃度(卍)、中濃度(卍)、低濃度(+), および陰性(-)の 5 段階半定

量の評価が可能であると考えられる。

2) HBs 抗体は 512 オーザブユニット以上の検体でも原血清のみの測定でそれ以上の単位の評価が可能である。

以上のごとく、本法は操作法も簡単で、測定に必要な血清量もわずかで、判定方法も明解であることから、RIA 半定量法として利用できると考える。

4. B 型肝炎関連抗原・抗体 RIA キットによる半定量測定法の意義

児玉 泰浩	中野 哲	綿引 元
武田 功	太田 博郎	杉山 恵一
坪井 英之	(大垣市民病院・二内)	
金森 勇雄	矢橋 俊丈	松尾 定雄
吉田 宏	樋口ちづ子	市川 秀男
木村 得次	(同・特放セ)	
佐々木常雄	石口 恒男	(名大・放)

現在 B 型肝炎ウイルス関連抗原・抗体の半定量測定は RPHA によってのみ行われている。今回われわれは共同演者の矢橋らの方法により、より検出感度の優れる RIA による 5 段階半定量法を試み、この臨床における有用性を HBs 抗原陽性例を対象として検討した。

1) S 抗原、e 抗原、e 抗体のいずれにおいても、その半定量値に年齢による差は認められなかった。

2) S 抗原、e 抗原の半定量値は慢性肝炎よりも肝硬変・肝癌の方が低値を示し、e 抗体では慢性肝炎よりも肝硬変・肝癌の方が高値を示した。これはウイルス感染後の経過が長くなるに従い、その抗原性が徐々に低くなり逆に抗体価が上がってくることを示している。

3) C 抗体の半定量値は急性肝炎では約 90% が低値、慢性肝炎・肝硬変・肝癌では約 90% が高値を示し、一過性感染か持続感染かの鑑別に非常に役立つものと思われる。

4) S 抗原と e 抗原、あるいは S 抗原と e 抗体との相関において、従来の原液測定による値ではなんの相関もみられなかったものが、半定量法によりおのおの $r=0.5476$ (危険率 0.1% 以下), $r=-0.4947$ (危険率 0.1% 以下) とかなりの相関性をもつことが認められた。

以上より RIA による 5 段階半定量法は、臨床においても十分応用し得る、意義ある測定法であると考えられる。